

地域医療連携室

フレンドリーだより

Community medicine cooperation room



看護師国際交流 (H29.6.7~16)



2017
vol.53

H29.9 発行

黒部市民病院 黒部市三日市1108-1

E-mail : friendly@med.kurobe.toyama.jp

眼瞼下垂症の治療について



形成外科医長 杉下 和之

形成外科は、まだまだ一般的に認知度が低く、整形外科と間違われたりすることが多い科です。

形成外科とは、身体に生じた組織の異常や変形、欠損、あるいは整容的な不満足に対して、あらゆる手法や特殊な技術を駆使し、機能のみならず形態的にもより正常に、より美しくすることによって、生活の質“Quality of Life”の向上に貢献する科です。

形成外科では、皮膚腫瘍、外傷、熱傷、アザ、瘢痕、ケロイド、褥瘡、難治性潰瘍、先天奇形、顔面骨骨折、乳房再建、後天性の変化に対する再建などを行っています。

今回はその中から老人性眼瞼下垂症についてお話しします。

眼瞼下垂症とは上まぶたが下垂し、まぶたが開きにくくなり、物が見えにくくなる状態です。眼瞼下垂には、生まれつき下垂している先天性眼瞼下垂と後天性の眼瞼下垂があります。先天性眼瞼下垂は、生まれつき目が開きにくい状態で、左右差がある場合が多く見られます。老人性眼瞼下垂は、加齢による皮膚の弛緩に加え、眼瞼挙筋と瞼板の腱膜が伸びたり、緩んだりして、瞼板が正常に持ち上がらず、まぶたが開きづらくなっている状態です。一生懸命に目をあげようとするため眉毛が上がり、おでこにシワがよります。顎を上げると見やすいため、日常的に顎を上げていることがあります。加齢、花粉症やアトピーなどで目をこすることにより生じるとされています。近年、ハードコンタクトによると思われる若い人の眼瞼下垂が増えているといわれています。

治療は局所麻酔で手術を行います。両目の手術を行った場合で約2時間です。術後の急な出血などに対応するため、入院で手術を行います。皮膚の弛緩のみのものは余剰皮膚切除（余った皮膚のみを切除）を、腱膜の緩みによるものは眼瞼挙筋腱膜前転法を行います。通常は手術翌日には退院となります。

まぶたは非常に繊細で複雑な構造をしており、同時に、目立つ位置にあるため、わずかな左右差でも気になります。そのため、眼瞼下垂の手術は機能面と、左右のバランスや二重の形など、外見上の面の両方で満足を得るのが難しい治療だといえます。しかも、まぶたは腫れやすいため、手術中や手術直後に結果や効果を判定することが難しくなります。また、手術自体は成功しても、眼瞼下垂の手術を行うと、眉毛を上げて目を開く必要がなくなります。術後は次第に眉毛の位置が下がり、余った皮膚が二重の線に覆いかぶさって、手術直後に比べて二重の幅は狭くなっていきます。そうすると目が手術直後より少し細くなり、後戻りをしたと感じることもあります。そのような左右差や術後の後戻りに関しては術後しばらくしてから修正を行うこともあります。

また、術後は目が大きく開くようになるため、周囲の方から印象が変わったといわれることも多いようですが、眼が開くようになって視野が広がることによるメリットの方が大きいかと思います。

このような老人性眼瞼下垂の症状を認める方がいればご相談いただければ幸いです。

臨床心理士よりご紹介

臨床心理士 八木他恵子

昨年11月、当院に心理相談室が新設されました。これまでは授乳室や診察室などを間借りしていたため、面接のたびにお部屋が違うなど患者さんにご迷惑をおかけしていました。しかしこのたび、ようやく、安心して話していただける守られた空間をご提供できるようになりました。

臨床心理士という職種をご存じない方も多いと思いますので、この場をお借りして少しご紹介させていただきます。

当院では、資格を持った2名の心理士が患者さんの精神的ケアを担当しております。話し相手をさせていただくこともあれば、カウンセリングをさせていただくこともあります。カウンセリングと聞くと話すだけで元気になるイメージを持たれるかもしれませんが、そうではありません。面接では患者さんの多くが自分自身について深く語られます。よく知らない相手に自己開示するのはとても勇気が要り、疲れます。時には落ち込みます。ですがそのなかで考えや感情をまとめたり、それを心の引き出しにそっと仕舞ったりできることがあります。その作業にお付き合いさせていただくのがわれわれの仕事です。

当院のカウンセリングは小児科でのニーズが非常に高いです。よって、しばしば子どもたちとお話ししたり遊んだりしています。心理相談室（プレイルーム）に入りますと、大きなスライムのぬいぐるみが出迎えてくれます。抱きかかえるのに丁度いいサイズ感と愛くるしい笑顔で人気者です。心が疲れ、傷ついた子どもたちがそれを抱きかかえて体を預けるのを見ていると、今彼らに必要なのは受け止めてもらえる安心感なのだと思わずにいられません。そこに安心を求めずとも「大丈夫」と思えるよう支えていくことも、われわれの仕事の1つです。

未熟な2人ではありますが、今後も患者さんから学び、歩調を合わせ、ときには背中をそっと押す存在でありたいと思っています。皆様どうぞよろしくお願いいたします。



平成29年度第1回 新川地域脳卒中連携パス症例検討会

去る6月30日（金）18時30分より、新川地域における脳卒中連携パス症例検討会が講堂にて開催されました。

今回は、当院にて脳梗塞で入院した患者さんが、池田リハビリテーション病院へ転院し、サービス付き高齢者住宅に入所された症例でした。一人暮らしでご家族とは疎遠状態にあり、ご家族の協力が得難い状況のため回復期リハビリ病院への転院調整が難航しました。この症例より、患者



さんの将来の生活を見極めながら、発症早期から自治体の担当窓口や社会福祉関係機関等と連携を取り、多職種が協働して患者さんのニーズに対応することが大事であることを学びました。

各担当者からは、それぞれの役割による苦労話も聞かれ自由な発言の機会があったことで、他職種間の理解と連携が強まったように思われました。共通のパスを使用し、今後連携パスの改善とともに「互いに顔が見える連携」の場を持つことで、他職種連携が更に深まっていくよう症例検討会を重ねていくことが望ましいと思われました。

開催当日63名の医療・福祉関係者が参加し、1時間余りにわたり熱心に討議されました。

集団災害対応訓練を行いました

去る7月1日（土）、当院において、県内で大規模地震が起こり多数の被災患者が発生したとの想定で、集団災害対応訓練を実施しました。

今回の訓練は、正面玄関及び駐車場が完成し、正面エントランスホールで多数の患者を受け入れ対応するのを検証すること、職員の行動手順を記載したアクションカードを活用すること、そして今年度より結成した緊急時医療班の行動確認をすることを中心に実施しました。

当日は、全職員への招集訓練の後、新川地域消防本部、富山県東部消防本部及び富山医療福祉専門学校との協力のもと、約200人が真剣に訓練に取り組みました。おりしも、黒部市に大雨洪水警報が発令されて、一部避難情報が出されるなど、本部では様々な情報が飛び交い緊迫した本番さながらの状況でもありました。

今後も、いつ起きるかわからない自然災害に対し、日頃より災害拠点病院の役割を果たせるよう、全職員の意識向上と対応に努めていきます。



看護師国際交流

当院では毎年、米国ジョージア州メーコン市にあるメディカルセンターナビセントヘルスと医療交流を行っています。今年は看護師交流として、エイム・クランス看護師とアナンダ・コーセット看護師が6月に来院しました。来院翌日、院内講演会が開催されました。エイム・クランス看護師は「Navigating the Oncology Maze」と題して、ナビゲーターナースの役割について講演を行いました。米国では、治療を受ける患者さんにとって看護師が大きな役割を果たします。癌の診断から人生の終わりまで癌治療過程のどんな時にでも、癌患者一人ひとりに対して治療の弊害となるものを克服するための継続的なサポートを行います。24時間電話相談に応じる体制もとっていると説明がありました。アナンダ・コーセット看護師は脳神経ICUと一般ICUの両方で勤務したことにより、急性期患者の看護知識を身に付けた誇りある経験から、「体外式血液浄化療法（CRRT）」と題して、CRRTのメカニズムや原理、合併症などについて講演を行いました。お二人の看護師の講演を参加者は1時間余り熱心に聞き入りました。



滞在中、院内各部署で看護業務を見ていただき、地域医療支援センタースタッフとの半日交流も行われました。地域医療保健室の保健師と共に訪問看護に同行し、日本の在宅ケアを見てもらうことができました。地域医療支援センター内では、看護師長より部署紹介を行い、お二人を囲んだ昼食会は“ピザ”を食べながらの和やかなひと時となりました。「ピザ！オイシイ」、「ゴチソウサマ」など、お二人がしゃべる数々のカタコト日本語に癒されました。国際交流は当院の魅力でもあり今後も取り組んでいく予定です。

ホームページをリニューアルしました

この度、ウェブサイトのリニューアルを行いましたのでお知らせします。「扇状地ネット」が利用しやすいように、高い視認性と利便性の向上を図りました。



フレンディー新メンバーようご挨拶です



地域医療支援センター 看護師長 能登 敦子

本年4月に外来から異動になりました看護師長の能登です。

地域医療支援センターは、病院や病気に関連して起こるあらゆる課題を患者さんと一緒に考えるところであり、地域医療連携室、在宅介護支援センター、地域医療保健室の3者がそれぞれの役割に応じ患者支援を提供しようと日々努力を行っています。院内外の皆様と手と手を取りあって繋がっていきたいと思います。

就任して5か月が経過し、連携の中で多くの方々との出会いがありました。更にその出会いが広がるよう、医療・介護の連携を強化していきたいと思います。これからも、地域の医療や福祉に携わる方々が活動する拠点として当院を利用されますよう、連携を密に行える体制を目指しますのでよろしくお願い致します。



地域医療連携室 医療ソーシャルワーカー 大坂 菜月

初めまして。4月から地域医療連携室フレンディーに医療ソーシャルワーカーとして働かせていただいております、大坂菜月です。地域連携を大切にしながら、患者さんやご家族の思いに寄り添った退院支援について考えていきたいと思っています。まだまだ分からないことばかりで、地域の各医療機関や各福祉施設の皆様、ケアマネージャーの皆様にはご迷惑をおかけすると思いますが、「明るく元気に」をモットーに一生懸命頑張っていきますので、どうぞよろしくお願い致します。

講演・勉強会のご案内

1. 新川胸部疾患検討会

日時：毎月第2木曜日
午後6：30～
午後8：00

場所：中央棟3階 会議室6

2. オープンベッドカンファレンス

日時：偶数月の第2水曜日(不定期開催)
午後6：45～
午後7：45

場所：中央棟3階 講堂

3. 内科カンファレンス

日時：毎週火曜日
午後6：30～

場所：中央棟3階 会議室6